

スポーツを核に、果敢な行動力と 心をつかむ人間力で地域を興す



年々参加者が増える「鉄人レース」は今年もたくさんの小学生が参加。

【プロフィール】 埼玉県・春日部市生まれ。荒川区6人制バレーボール連盟の会長を辞任後、荒川区バレーボール協会副理事就任(現 会長)。平成18年荒川区体育協会理事長に就任。その後も南千住スポーツクラブの主宰や汐たま実行委員会委員長の役職に就き、地域に密着した活動で活躍中。荒川区南千住在住。



高田忠則さん

たかだ ただのり

荒川区体育協会会長
南千住スポーツクラブ会長

第223回 荒川の人

PTA会長を終えたとたん 地域のさまざまなリーダー役に

高田忠則さんは、埼玉県春日部市出身。しかし、「親父も祖父も南千住の都電に勤めていました」ということで、荒川区とは不思議な縁で結ばれています。

昭和52年、高田さんは大学卒業後、太陽信用金庫(現・城北信用金庫)に就職します。汐入支店に勤務し、同地区の営業を担当することになり、そこで知り合ったのが現在の奥様。昭和60年に結婚し、以降、高田さんはこの地にすっかり根をおろすことになりました。

一方、信金のバレー部のエースだった高田さんは、荒川区6人制バレーボール連盟の発足にあたり副会長に就任します。スポーツ振興のリーダーへの道はここからはじまったといっています。

その後、3人のお子さんが旧第五瑞光小学校に学び、4年間にわたりPTA会長を務めますが、「やめた」とたん、民生委員、青少年委員、社会教育委員と、3つの役職をやるはめになりました」と高田さんは笑います。しかし、斬新な企画力、人を束ねる組織力、これだと思ったら実行に移す行動力、会話が上手で人を惹きつける人間的な魅力、それらをあわせ持つ高田さんのような人を、だれも放っておくはずはありません。

スポーツを軸にしたアイデアで 区民の交流を実現

人柄、その持てる力、経験、人脈…高田さんが、荒川区のスポーツ分野でのキーマンとなっていたのは、当然といえば当然の成り行きで

した。

バレーボール協会副理事長(現在は会長)ほかさまざまな団体の重要なポジションで活動しながら、荒川区体育協会の理事を務めていた高田さんが、藤岡前会長の後を受けて体協理事長になったのは平成18年のこと。いきなりトップへの抜擢でした。

「体育振興のために予算を出す」と西川区長が言ってくれていたこともあり、全力で走り出しました」と高田さんは当時を振り返ります。そして、まず企画し実現させたのが、各競技団体の枠を超えた催し「生涯スポーツフェスティバル」でした。これは、荒少連、ボイスカウト、青少年委員でも役職についていた高田さんだからこそ実現できたこと。これらの団体がこぞって協力したのです。とりわけ体育の日の記念事業の1つとして始めた「武道全部見せるぞ!」は、画期的なイベントでした。

また、体育指導員と協同してはじめたのが、「楽々ニュースポーツ」というイベント。数百人規模のものが、今では千人以上が一堂に会するまでに発展しました。こうしたクロアスオーバーな催しができるのも、高田さんならではのことでしよう。

環境、青少年育成や 地域の活性化に尽力

話は前後しますが、荒川区で「ちびっこトライアスロン大会」を実現させたのも高田さんです。青少年委員になったばかりの平成12年のこと、子どもの安全への配慮から自転車なしのスイム&ランのレースをはじめました。それでも、なんて危ないことをさせるのかと非難轟々だったそうですが、やがて大会は全荒川区へと拡大し、今年の第12回「鉄人



「ゴミ拾いはスポーツだ!」をスローガンに開催される「スポーツゴミ拾い大会」。地域住民の方が、スポーツとゴミ拾いを通じて交流を深めました。

レース」では参加者300人を大きく超えるまでの人気イベントに成長しました。

そして平成22年、高田さんは、これまでの経験と人脈と実績を活かし、文部科学省、(財)日本体育協会が推進する地域住民の自主的な運営を目指す育成モデル事業として、総合型地域スポーツクラブ「南千住スポーツクラブ」を設立し、地域社会の活性化に繋がるような、荒川区のリーディングクラブにするべく活動を広げています。

高田さんは、実はスポーツにとどまらず、子育て支援や「カーシェアリング」などの環境問題への取り組みをはじめ、地元で役立つさまざまな活動で大いにリーダーシップを発揮されています。まさに高田さんは、スポーツを基軸とした「総合型地域貢献人」とでも呼びたい存在です。「これからはジュニアの育成が大きな目標です。子どもたちがスポーツに接する場所をもっと作って行きたい」と今後の目標を語る高田さん。そんな高田さんの信条である「思いについて可能性さえあれば行動を起こす」という言葉は、いかにも頼もしく、力強く響くのでした。